

不安だらけの新型コロナ「レプリコンワクチン」

2024年9月9日 谷口恭・谷口医院院長 毎日新聞

今秋より再開される新型コロナワクチン接種が10月1日に始まると報道されたのは7月中旬でした。これまでのように全員が無料で受けられるわけではなく、65歳以上及び重症化リスクが高い60～64歳を対象とした「定期接種」となり、自己負担は7000円の見込み、定期接種の対象外の場合は任意接種で費用は未確定——といった情報が公表されました。厚生労働省は約3224万回分のワクチンを供給できると見込んでいますが、このうち427万回分を占めるのが「レプリコンワクチン」です。新たに登場するこのレプリコンワクチンについては、さまざまなおわさが飛び交い大きな混乱を招いています。私自身はその有効性に期待もしているのですが、政府や専門家の説明は不十分です。今回は今秋から使用されると言われているレプリコンワクチンについて私見を交えて述べてみたいと思います。

ワクチンの効果が薄れていく理由とは

まずは聞きなじみのないレプリコンワクチンが、どのようなタイプのワクチンかについてまとめておきましょう。「レプリコン」とは生物学的用語で、簡単に言えば「複製されるRNA（またはDNA）」のことです。そして、レプリコンワクチンとは「注入されたmRNAが自己複製されるワクチン」です。コロナワクチンが当初期待されたほど有効でなかった理由の一つは「ワクチンの効力が短期間で失われるから」です。それを考えると「レプリコンワクチンなら一度接種すればワクチンの有効成分（mRNA）が自己複製され、その結果ワクチンの効果も長持ちする」と一応は考えられます。しかし、そう簡単に素直にうなずけない理由が二つあります。

一つは、コロナワクチンの効果が短期間で失われるのは、ワクチンの効果が減少するからというよりもむしろ、ウイルスが短期間でかたちを変えていくことに原因があるからです。コロナウイルスの構造は1本鎖RNA型であり、生物学的に簡単に変異が起きます（ヒトのような2本鎖DNA型がもっとも変異しにくい）。また実際に新型コロナウイルスは、武漢株、アルファ株、デルタ株、オミクロン株、さらにそのオミクロン株がXBB、BA1、BA2、JN1、KP2、KP3など、まるで既存のワクチンからすり抜けるように次々にかたちを変幻させてきました。このことからワクチンの効果が長続きしないことが分かります。

食い違い説明

そして、レプリコンワクチンに手放しで賛成できないもう一つの理由は「安全性」です。mRNAワクチンは新型コロナウイルスのアウトブレイクをきっかけに誕生したまったく新しいタイプのワクチンであり、導入当初は「mRNAを体内に入れて安全性は担保されるのか」という疑問の声が小さくありませんでした。この疑問に対して、行政や感染症専門医らは「ワクチンとして体内に注入されたmRNAはすぐに分解されるから心配ない」と言ってきました。厚労省のサイトには「mRNAワクチンで注射するmRNAは短期間で分解されていきます」と記載されています。

しかし、この「短期間で分解されるから安心」という説明には疑問を呈する識者も少なくありません。「短期間で分解されない」ことを示唆した論文もあります。例えば、コロナワクチン接種から3週間後に死亡した76歳男性の脳と心臓からワクチン由来のスパイクタンパクが多数検出されたことを示した報告があります。64歳男性に発症したヘルペスウイルス関連の皮膚病巣からコロナワクチン由来のスパイクタンパクが検出されたとする日本の

報告もあります。また、ワクチンの成分の mRNA が母乳から検出されたことも報告されています。

つまり、「すぐに分解されるため安全」であったはずのワクチン由来の mRNA が、実際には長期間体内に残存してスパイクタンパクを作り出し、その結果、皮膚や心臓、脳を攻撃している可能性があると言わざるを得ないのです。そして、私の知る限り、こういった安全性に疑問を呈する論文や意見に対し、ワクチンがなおも安全であることを主張する政府や専門家の声は聞きません。

そんななか登場したのがレプリコンワクチンです。レプリコンワクチンの特徴は「体内に入った mRNA がすぐに消えず、自己複製を繰り返し、長期間体内に残るから有効」である点です。このように言われて、素直にこのワクチンを信頼できる人はどれくらいいるでしょう。なにしろ、つい最近までは「mRNA はすぐに消えるから安心」と言われていて、まるで手のひらを返したかのように今度は「mRNA は自己複製され長期間残るから安心」と言われているのです。

「接種者は出入り禁止」のクリニックも

すでに世論は不穏な方向に動いています。驚くべきことに、日本看護倫理学会はレプリコンワクチンに反対する声明文を公表しました。学会にもさまざまなものがあり、この学会は歴史が比較的新しく、規模も大きいわけではありませんが、それでも医療系の学会が政府が推奨しようとしているワクチンに対し、正式に反対の意思表示をするのは異例の事態です。

今のところ、他の医療系の学会でこのような表明をしているところは見当たりませんし、大きな病院で反対の意思表示をしているところはないようです。ですが、診療所・クリニックにはいくつかあるようで、なかにはワクチンに反対するのみならず、レプリコンワクチン接種者はそのクリニックに出入り禁止にすると表明しているところもあります。あるクリニックのウェブサイトには「急患で来院された方であっても（レプリコンワクチンを接種したことがあるのなら）直ちにお帰りいただきます」とまで書かれています。

ワクチンに反対するだけならまだしも、ワクチン接種者の出入り禁止とはただごとではありません。なぜこのような理屈が出てくるのかというと、このクリニックでは「シェディング」という現象を信じているからです。

シェディングとは、ワクチン接種者が病原体を体内で増幅させて他人に感染させることを指します。確かに以前、日本でも使われていた経口ポリオ生ワクチンにはこの現象がありました。ワクチン接種した小児の便から感染性のあるポリオワクチンが排出され他人に感染する事例があったのです。ですが、それは生ワクチンに限った場合であって、mRNA 型ワクチンでこのような現象が生じるとは思えません。

ところが、以前から「コロナワクチンはシェディングを起こす」といううわさは世界中で飛び交い、そんななかで登場したレプリコンワクチンは、体内で mRNA が自己複製されることを理由に「シェディングの温床になるからワクチン接種者に近寄ってはいけない」といううわさがまことしやかに蔓延（まんえん）しています。上述した日本看護倫理学会もそのシェディングを反対の理由の一つに挙げています。

直ちに分かりやすい説明を

私自身はレプリコンワクチンも含めて mRNA 型ワクチンがシェディングを起こすとは考



閣議後、記者会見する武見敬三厚生労働相＝東京都千代田区で2024年8月27日午前10時44分、肥沼直寛撮影

えていませんし、レプリコンワクチンの有効性にも期待しています。厚労省の2024年5月29日の資料によれば、レプリコンワクチンは従来のmRNA型ワクチン（ファイザー社製「コミナティ」）に比べて、（起源株+BA.4-5株に対して）有効性が高く、安全性は同等とされています。このような資料を公開するという事は、厚労省はレプリコンワクチンがいずれ従来のmRNA型ワクチンに取って代わることを前提としていると考えられます。

さて、本稿を執筆しているのは9月1日で、10月1日のワクチン開始予定日まで1カ月を切りました。実は私は8月中には政府からレプリコンワクチンについての正式な説明があると予測し、その内容を確認した上で本稿を書くつもりでした。しかし、その予測は見事に裏切られ、世間では混乱が増長されています。これだけ物議を醸しているワクチンが10月1日には定期接種になるのなら、政府や専門家は今すぐになんらかの見解を発表すべきです。

ただでさえ、国民の間では既存のコロナワクチンに対する不信感が高まっています。その最大の理由は「説明がないから」に他なりません。コロナワクチンが登場した21年、行政や専門家たちは「国民の8割が打てば集団免疫ができてもう安心」「自分たちは打つ」と繰り返し主張してきました。しかし、蓋（ふた）を開けてみれば、国民の8割が（少なくとも2回は）接種したのに集団免疫ができるどころか多くの国民が感染しました。また、これまで合計7回の接種機会があったなかで医療者が、あるいは厚労省の役人が何回接種したのかが分かりません。私の知る限り7回接種を完了した医療者は少数しかいませんし、ワクチン反対の意思表示をする医師がどんどん増えています。

政府や専門家は、これまでのコロナワクチンの総括、及び10月にも接種が開始されるレプリコンワクチンについて、国民に対して直ちに分かりやすい説明をする義務があると私は思います。